# 「海門とふ用微分積分、

第5章 重積分法

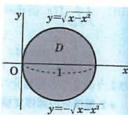
(1) つぎの2重積分を求めよ

$$\iint_D \sqrt{x} \, dx \, dy, \quad D: x^2 + y^2 \le x$$

(2) f(x,y) = 1 のとき、  $\iint_{\Omega} f(x,y) dx dy$  は D の面積に等しいことを示せ.

解答 (1)  $x^2+y^2=x$  は  $\left(x-\frac{1}{2}\right)^2+y^2=\left(\frac{1}{2}\right)^2$  と変形することによって, 中心が (1/2,0) で半径が 1/2 の円である。D はこの円の周および内部である。この Dをxに関する単純な領域と考える (p.86). よって、

$$I = \iint_{D} \sqrt{x} \, dx \, dy = \int_{0}^{1} dx \int_{-\sqrt{x-x^{2}}}^{\sqrt{x-x^{2}}} \sqrt{x} \, dy$$
$$= \int_{0}^{1} [\sqrt{x}y]_{-\sqrt{x-x^{2}}}^{\sqrt{x-x^{2}}} \, dx$$
$$= 2 \int_{0}^{1} \sqrt{x} \sqrt{x-x^{2}} \, dx = 2 \int_{0}^{1} x \sqrt{1-x} \, dx$$



いま,  $\sqrt{1-x}=t$  とおくと,  $x=1-t^2$ ,  $dx=-2t\,dt$ . よって

$$2\int_0^1 x\sqrt{1-x} \, dx = 2\int_1^0 (1-t^2)t(-2t)dt$$
$$= 4\int_0^1 (t^2-t^4)dt = 4\left[\frac{t^3}{3} - \frac{t^5}{5}\right]_0^1 = \frac{8}{15}$$

(2) p.85 の 2 重積分の定義(1)により、f(x,y)=1 のとき  $f(x_i,y_i)\Delta S_i=\Delta S_i$ である. よって

$$\iint_D f(x,y) dx dy = \lim_{d \to 0} \sum_{i=1}^n f(x_i, y_i) \Delta S_i = \lim_{d \to 0} \sum_{i=1}^n \Delta S_i = D$$
 の面積

1.1 つぎの 2 重積分を求めよ

$$(1) \quad \iint_{D} \frac{x}{x^{2} + y^{2}} \, dx \, dy, \quad D: y - \frac{1}{4}x^{2} \ge 0, \ y - x \le 0, \ x \ge 2$$

(2) 
$$\iint_D \sqrt{xy - y^2} \, dx \, dy$$
,  $D: 0 \le y \le 1, y \le x \le 10y$ 

新田·极田(サイエス社)

5.1 2 重 積 分

2 重積分(2)

(1) つぎの 2 重積分を計算せよ.

$$\iint_D \sqrt{4x^2 - y^2} \, dx \, dy, \quad D: 0 \le y \le x \le 1$$

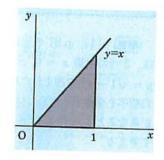
(2) 曲面  $z = e^{px+qy}$   $(pq \neq 0)$ が xy 平面の正方形  $D=\{(x,y): 0 \leq x \leq 1, 0 \leq y \leq 1\}$  との間につく る立体の体積を求めよ、

解答 (1) 右図をxに関する単純な領域とみる。 p.35 の不定積分の公式(7)より.

$$I = \int_0^1 dx \int_0^x \sqrt{4x^2 - y^2} dy$$

$$= \int_0^1 \left[ \frac{y}{2} \sqrt{4x^2 - y^2} + \frac{4x^2}{2} \sin^{-1} \frac{y}{2x} \right]_0^x dx$$

$$= \int_0^1 \left( \frac{x}{2} \sqrt{3x^2} + 2x^2 \sin^{-1} \frac{1}{2} \right) dx$$



$$= \int_0^1 \left( \frac{\sqrt{3}}{2} x^2 + 2x^2 \frac{\pi}{6} \right) dx = \left[ \frac{\sqrt{3}}{6} x^3 + \frac{\pi}{3} \cdot \frac{x^3}{3} \right]_0^1 = \frac{1}{3} \left( \frac{\sqrt{3}}{2} + \frac{\pi}{3} \right)$$

(2)  $I = \iint_D e^{px} \cdot e^{qy} dx dy$  で変数に関して分離された形である。p.87 の(10)

$$I = \left(\int_0^1 e^{px} dx\right) \left(\int_0^1 e^{qy} dy\right) = \left[\frac{e^{px}}{p}\right]_0^1 \cdot \left[\frac{e^{qx}}{q}\right]_0^1 = \frac{e^p - 1}{p} \cdot \frac{e^q - 1}{q}$$

2.1 つぎの 2 重積分を求めよ

(1)  $\iint_{D} \log \frac{x}{u^2} dx dy, \quad D: 1 \le y \le x \le 2$ 

(2) 
$$\int_0^{\pi} \left\{ \int_0^{1+\cos\theta} r^2 \sin\theta \, dr \right\} d\theta \quad (p.65 \, \text{の図を参照})$$

(3)  $\iint_{\mathcal{D}} y \, dx \, dy$ ,  $D: \sqrt{x} + \sqrt{y} \le 1$  (p.53 の上図を参照)

## 海温公用得形代数」

第4章 実数上の数ベクトル空間

44

一例題 2-

-1 次結合

 $R^3$  のベクトル a = (3, -1, 3), b = (-2, 1, 1) をベクトル  $a_1 = (2, -1, 1),$   $a_2 = (-1, 1, 1), a_3 = (-4, 3, 1)$  の 1 次結合で表せ.

解答  $A = [a_1 \ a_2 \ a_3], x = {}^t[x_1 \ x_2 \ x_3]$  とするとき連立 1 次方程式

$$x_1 a_1 + x_2 a_2 + x_3 a_3 = Ax = a \tag{1}$$

$$x_1 a_1 + x_2 a_2 + x_3 a_3 = Ax = b {2}$$

をそれぞれ解けばよい. 右の表から(1)は解

$$m{x} = egin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{bmatrix} = egin{bmatrix} 2 + \lambda \\ 1 - 2\lambda \\ \lambda \end{bmatrix} \, (\lambda \, は任意) \, を持つから、た$$

とえば  $\lambda = 0$  として  $a = 2a_1 + a_2$  を得る.

また、②は

 $rank[a_1 \ a_2 \ a_3] = 2$ ,  $rank[a_1 \ a_2 \ a_3 \ b] = 3$ が等しくないからは解を持たない。つまり、bは  $a_1$ ,  $a_2$ ,  $a_3$  の 1 次結合として表せない。

注意 この例のように  $a_1, a_2, a_3, b$  は 1 次従属であるが  $a_1, a_2, a_3, b$  のどれもが残りのベクトルの 1 次結合で表されるというわけではない。

6	a	a <sub>3</sub>	az	a <sub>1</sub>
-2	3	-4	-1	2
1	-1	3	1	-1
1	3	1	1	1
1	3 2	1	1	1
2	2	4	2	0
-4	-3	-6	-3	0
0	2	-1	0	1
1	1	2	1	0
-1	0	0	0	0



### ~ 問 是

- **2.1**  $\mathbf{R}^3$  において  $\mathbf{a} = (2, -1, a)$  が  $\mathbf{a}_1 = (1, 0, 1)$ ,  $\mathbf{a}_2 = (0, 2, 2)$  の 1 次結合であるように a を定めよ.
- **2.2**  $\mathbb{R}^3$  のつぎのベクトルは 1 次従属か、1 次従属ならば、そのうちの 1 つを他の 2 つのベクトルの 1 次結合として表せ、
  - (a)  $a_1 = (2, 1, 2), a_2 = (1, 1, 4), a_3 = (-1, 1, 8)$
  - (b)  $a_1 = (2, -2, 2), a_2 = (1, -1, 1), a_3 = (1, 0, 1)$

吾田、本村(サイエンスネエ)

4.1 実数上の数ベクトル空間

45

一例題3

-1 次結合と独立性-

 $R^n$  のベクトル a,b,c が 1 次独立のとき、a+b,a-b,a-3b+2c は 1 次独立であるかどうか調べよ。

解答

$$x(a + b) + y(a - b) + z(a - 3b + 2c) = 0$$

となるのはどんな場合か調べてみる. 上式から

$$(x+y+z)\mathbf{a} + (x-y-3z)\mathbf{b} \oplus 2z\mathbf{c} = \mathbf{0}$$

で a,b,c が 1 次独立だから,a,b,c の係数がそれぞれ 0 でなくてはならない.よっ

て連立 1 次方程式  $\begin{cases} x + y + z = 0 \\ x - y - 3z = 0 \\ y 2z = 0 \end{cases}$   $\begin{bmatrix} 1 & 1 & 1 \\ 1 - 1 - 3 \\ 0 & 0 \neq 2 \end{bmatrix}$  を得る. 係数行列  $A = \begin{bmatrix} 1 & 1 & 1 \\ 1 & -1 & -3 \\ 0 & 0 \neq 2 \end{bmatrix}$  の階数は  $\operatorname{rank} A = 3$  (また  $0 - 2 - 4 \\ 0 & 0 + 2 \end{bmatrix}$ 

は  $\det A = -4 \neq 0$ ) だからこの方程式は非自明解を持たない。 すなわち、解は x = y = z = 0

だけである。よって、a+b, a-b, a-3b+2c は 1 次独立である。

**3.1**  $a_1, a_2, a_3, a_4$  が 1 次独立のとき、つぎのベクトルは 1 次独立かどうか調べよ.

4 (a)  $a_1 + a_2$ ,  $a_1 - a_2$ ,  $a_1 - 3a_2 + a_3$ 

(b)  $a_1 + a_2$ ,  $a_2 + a_3$ ,  $a_3 + a_1$ 

 $\rightarrow$  (c)  $a_1 + a_2, a_2 + a_3, a_3 + a_4, a_4 + a_1$ 

 $oldsymbol{a_1,a_2,\ldots,a_m}$  を  $oldsymbol{R}^n$  の m 個の 1 次独立なベクトルとし,m 個のベクトルを

$$b_j = p_{1j}a_1 + p_{2j}a_2 + \dots + p_{mj}a_m \quad (j = 1, 2, \dots, m)$$

とする. このとき, つぎが成り立つことを示せ.

 $b_1, b_2, \ldots, b_m$  が 1 次独立  $\iff$  rank  $[p_{ij}] = m$ 

4.5 正規直交基底

直交補空間

61

グラム・シュミットの直交化法-グラム・シュミットの直交化法により、つぎのベクトルから  $\mathbb{R}^3$  の正規直交基底 を作れ.

$$x_1 = (-2, 1, 0), \quad x_2 = (-1, 0, 1), \quad x_3 = (1, 1, 1)$$

まず  $y_1 = x_1$  とおくと

$$a_1 = \frac{y_1}{|y_1|} = \frac{1}{\sqrt{5}}(-2, 1, 0) = \left(-\frac{2}{\sqrt{5}}, \frac{1}{\sqrt{5}}, 0\right)$$

つぎに

$$y_2 = x_2 - (x_2 \cdot a_1)a_1 = (-1, 0, 1) - \frac{2}{5}(-2, 1, 0) = \left(-\frac{1}{5}, -\frac{2}{5}, 1\right)$$

を正規化して

$$a_2 = \frac{y_2}{|y_2|} = \frac{1}{\sqrt{30}}(-1, -2, 5) = \left(-\frac{1}{\sqrt{30}}, -\frac{2}{\sqrt{30}}, \frac{5}{\sqrt{30}}\right)$$

また

$$y_3 = x_3 - (x_3 \cdot a_1)a_1 - (x_3 \cdot a_2)a_2$$
  
=  $(1, 1, 1) + \frac{1}{5}(-2, 1, 0) - \frac{1}{15}(-1, -2, 5) = \left(\frac{2}{3}, \frac{4}{3}, \frac{2}{3}\right)$ 

を正規化して

$$a_3 = \frac{y_3}{|y_3|} = \frac{1}{\sqrt{6}}(1, 2, 1) = \left(\frac{1}{\sqrt{6}}, \frac{2}{\sqrt{6}}, \frac{1}{\sqrt{6}}\right)$$

P.60

正規直支至新記 1分から 1十年.

- 14.1 グラム・シュミットの直交化法により、つぎのベクトルから各空間の正規直交 基底を作れ.
  - (a)  $\mathbb{R}^2$  において、 $\mathbf{x}_1 = (-1,3), \mathbf{x}_2 = (2,-1)$
  - (b)  $\mathbf{R}^3$  において、 $\mathbf{x}_1 = (1,1,0), \mathbf{x}_2 = (1,0,1), \mathbf{x}_3 = (0,1,1)$
  - (c)  $R^3$   $\vdash$   $\exists v \vdash \tau$ ,  $x_1 = (1, 1, 1), x_2 = (1, 0, 1), x_3 = (-1, 0, 1)$
  - (d)  $\mathbf{R}^4$  (a)  $\mathbf{x}_1 = (1, 1, 0, 0), \mathbf{x}_2 = (0, 1, 1, 0), \mathbf{x}_3 = (0, 0, 1, 1),$  $x_4 = (1, 1, 0, 1)$

(a)  $V \in \mathbb{R}^n$  の部分空間とする。

 $V^{\perp} = \{x \in \mathbb{R}^n;$ すべての  $y \in V$  に対して  $x \cdot y = 0\}$ 

は  $\mathbb{R}^n$  の部分空間になることを示せ (これを V の直交補空間という).

(b)  $V = \{(x_1, x_2, x_3) \in \mathbb{R}^3; 3x_1 + x_2 - x_3 = 0, x_1 - 5x_2 + x_3 = 0\}$  Øē 交補空間 Vュ を求めよ

解答 (a) 零ベクトル 0 はどんなベクトルとも直交するから  $0 \in V$ . よって  $V^{\perp}$ は空でない. V のかってなベクトル y に対して

$$egin{aligned} oldsymbol{x}_1, oldsymbol{x}_2 \in V^\perp & \Longrightarrow & (oldsymbol{x}_1 + oldsymbol{x}_2) \cdot oldsymbol{y} = oldsymbol{x}_1 \cdot oldsymbol{y} + oldsymbol{x}_2 \cdot oldsymbol{y} = 0 \ oldsymbol{x} \in V^\perp, oldsymbol{\lambda} \in oldsymbol{R} & \Longrightarrow & (oldsymbol{\lambda} oldsymbol{x}) \cdot oldsymbol{y} = oldsymbol{\lambda}(oldsymbol{x} \cdot oldsymbol{y}) = 0 \end{aligned}$$

よって、 $x_1 + x_2, \lambda x \in V$  だから V は部分空間をなす.

(b) 同次連立1次方程式

$$\begin{cases} 3x_1 + x_2 - x_3 = 0 \\ x_1 - 5x_2 + x_3 = 0 \end{cases}$$
 $x_1$   $x_2$   $x_3$   $x_4$   $x_5$   $x_5$   $x_6$   $x_6$ 

よって、(1,1,4) は V の基底であり、その直交補空間は

$$V^{\perp} = \{(x_1, x_2, x_3); x_1 + x_2 + 4x_3 = 0\}$$

である.  $V^{\perp}$  の基底を求めるために方程式  $x_1 + x_2 + 4x_3 = 0$  を解くと

$$\begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{bmatrix} = \lambda \begin{bmatrix} -1 \\ 1 \\ 0 \end{bmatrix} + \mu \begin{bmatrix} -4 \\ 0 \\ 1 \end{bmatrix}$$

 $_{\perp}$ って、 $V^{\perp}$  の基底 (-1,1,0),(-4,0,1) で生成される部分空間である。

注意 (3,1,-1),(1,-5,1) も V → の基底である.

- 15.1  $\mathbf{R}^n = V \oplus V^{\perp}$  であることを示せ、
- 15.2 つぎのベクトルで生成される各部分空間 V の直交補空間  $V^{\perp}$  を求めよ
  - (a) (1,0,-7)
  - (b) (3,1,-1), (1,-5,1)
  - (c) (1,0,-1,2), (-1,1,1,0)

教学社 2017多度中于一試験

第2間 (面積,最大・最小)

$$C_1: y = \frac{1}{2}x^2 + \frac{1}{2}$$
 遊るエイ/エ・凡

$$C_2: y = \frac{1}{4}x^2$$

(1) 右図の赤く塗られた部分 Dの面積 S は

$$S = \int_{a}^{a+1} \left\{ \left( \frac{1}{2} x^{2} + \frac{1}{2} \right) - \frac{1}{4} x^{2} \right\} dx$$

$$= \int_{a}^{a+1} \left( \frac{1}{4} x^{2} + \frac{1}{2} \right) dx$$

$$= \left[ \frac{1}{12} x^{3} + \frac{1}{2} x \right]_{a}^{a+1} = \frac{(a+1)^{3} - a^{3}}{12} + \frac{(a+1) - a}{2}$$

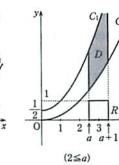
$$= \frac{3a^{2} + 3a + 1}{12} + \frac{1}{2}$$

$$= \frac{a^{2}}{4} + \frac{a}{4} + \frac{7}{12} = \frac{1}{4} \left( a + \frac{1}{2} \right)^{2} + \frac{25}{48}$$

である。Sはa= 2 で最小値 25 をとる。

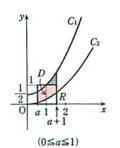
 $(1 \le a \le 2)$ 

(2) 上図より、直線 v=1 は、C1と  $(\pm 1, 1) \tau, C_2 \xi (\pm 2, 1)$ で交わることがわかる。a がa≥0 の範囲を動くとき、4点(a,0). (a+1, 0), (a+1, 1), (a, 1) を頂占とする正方形 R と(1)の図形 D の共 通部分については、aの値に応じて右 図のようになる。したがって、正方形 Rと図形 Dの共通部分 (図の赤く塗



られた部分) が空集合にならないのは 0≤a≤ 2 のとき である。

 $1 \le a \le 2$  のとき、正方形 R は放物線  $C_1$  とx 軸の間にあり、 この範囲でaが増加するとき、RとDの共通部分の面積Tは減少する。「ツ」に当てはまるものは「り」である。 したがって、Tが最大になるaの値は、 $0 \le a \le 1$ の範囲にあ



る。 $0 \le q \le 1$  のとき、(1)の図形 D のうち、正方形 R の外側にある部分(図のグレ ーに塗られた部分) は、図より、 $C_1$ と 2 直線 v=1、x=a+1 で囲まれた図形であ るから、その面積 Uは

$$U = \int_{1}^{a+1} \left\{ \left( \frac{1}{2} x^{2} + \frac{1}{2} \right) - 1 \right\} dx = \int_{1}^{a+1} \left( \frac{1}{2} x^{2} - \frac{1}{2} \right) dx$$

$$= \left[ \frac{1}{6} x^{3} - \frac{1}{2} x \right]_{1}^{a+1} = \frac{(a+1)^{3} - 1^{3}}{6} - \frac{(a+1) - 1}{2}$$

$$= \frac{a^{3} + 3a^{2} + 3a}{6} - \frac{a}{2} = \frac{a^{3}}{6} + \frac{a^{2}}{2}$$

である。よって、0≤α≤1において

①の右辺の増減を調べる。

$$\frac{dT}{da} = -\frac{1}{2}a^2 - \frac{1}{2}a + \frac{1}{4} = -\frac{1}{4}(2a^2 + 2a - 1) \quad (0 \le a \le 1)$$

 $\frac{dT}{da} = 0 \pm 0$ ,  $a = \frac{-1 \pm \sqrt{3}}{2}$  であるから

0≤α≤1における Tの増減は右表のよ うになる。よって、 Tは

	-1	+√	3
a = -		2	

а	0		$\frac{-1+\sqrt{3}}{2}$		1
$\frac{dT}{da}$		+	0	-	
Т	$\frac{7}{12}$	1	極大	`	<u>5</u> 12

で最大値をとることがわかる。

- (1)  $C_1$  はつねに  $C_2$  の上側にあるので S を与える定積分の立式は簡単である。また、 定積分の計算結果はaの2次式であるから、Sの最小値を求めることも容易である。
- (2) 図をていねいに描いて、RとDの共通部分を正しく把握することが肝心である。 a=2のとき R と D の共通部分は点(2, 1)のみであり、a>2 に対しては共通部 分はなくなる。また、 $1 \le a \le 2$  のとき、共通部分の面積は、a の増加とともに減少 することも図から容易にわかる。

本間では最大値を求める必要はないが、最大値も求められるようにしておきたい。

①に
$$a = \frac{-1 + \sqrt{3}}{2}$$
 を直接代入することはすすめられない。次のようにするのが定石